今週の一枚：香港出稼ぎフィリピン・メイドさんの休日　　2011年11月6日　香港にて撮影

フィリピンは、人そのものが大きな輸出品である。
「海外に出て稼ぐ」ということに何の気負いも恥じらいもなく、ごく自然である。
実際に、この地には、仕事がない、また希望した給料に見合う職場がない、という現実がある。
加え、英語が出来ることで、その目は海外に向けられる。
看護士や介護士も然りであり、メイドやベビーシッターも、世界に多くの需要がある。
ここ香港には、植民地時代から、英国人がフィリピン人メイドを多く雇用してきたという歴史がある。
こればかりはコミュニケーションがとれない地元の人間では、その役をしない。
また、ここにきて、広東語（香港の言葉）をまで学ぶフィリピン人も増え、香港人家庭にも進出してきた。
かくして、香港は、世界最大20万人の数に及ぶフィリピン人メイドが支える国となった。
香港政府が指導・管理するこれらメイドの雇用条件では、日曜日および祭日には休みを与えなければならないことになっている。
この休みが彼女たちにとって最大の息抜きであり楽しみとなる。
この日、彼女たちはそれぞれ約束の場所に集まり、持参した食べ物やスナックを囲み、終日、自分たちの言葉で話に興じる。
写真は、日曜日の香港のいたるところで見られ、今や、香港の風物詩ともなった、この風景を撮影したものである。
それにしても、何と楽しそうな様子であろうか。
彼女たちの屈託のない笑顔はフィリピン女性の逞しさそのものでもある。